

特集 橈骨遠位端骨折治療 Update

introduction

橈骨遠位端骨折は上肢骨折のなかであらゆる年齢層において最も頻度の高い骨折であり、超高齢社会を迎えています患者数が増えていることはいうまでもありません。本誌を手にする若い先生の中には今週も手術を行い、来週も予定している、そんな先生方が多くいらっしゃると思います。骨脆弱性に対する対応が求められるなか、約20年前にロッキングプレートが生まれ、日々進化を遂げています。医療機器メーカー各社によりそれぞれにコンセプトをもったインプラントが開発され、数十機種以上のインプラント選択が可能となりました。選択の幅が広がることは喜ばしいことですが、一方で選択に迷う場面も多くあるのではないかと思います。また、既存のインプラントでは対応不能な骨折型も近年明らかとなり、さらに開発が進んで新しいインプラントが世に出てまいりました。

骨折型に応じて治療選択、術式選択、インプラント選択を行うわけですが、研修医、専門医、手外科専門医、非専門医を問わず本誌を手にする先生方に、インプラント選択を含めた橈骨遠位端骨折の現在の標準治療を示し、診療の一助となることを願って、本誌においては10年振りとなる橈骨遠位端骨折の特集を組みました。橈骨遠位端骨折は外傷であり、すべての骨折が既存の骨折型に分類できるとは限らないことは整形外科医であればたびたび経験することであり、治療法の選択に答えのない骨折もたくさんあります。しかし現場ではその答えを1つに絞らざるをえず、その結果が予想外であることも少なくありません。そのような結果はご集積いただいて、本誌もしくはその他で公表していただいて情報を共有することで、治療の進歩にご貢献いただければ幸甚に存じます。

一方、骨折治療では当然のことながら軟部組織の合併損傷に留意し、必要があれば同時に治療する機会も多く、今回そのようなテーマでもご執筆いただいております。合併症については橈骨遠位端骨折固有のものに加え、インプラント固有の合併症も知られてきており、そのようなテーマでもご執筆いただいております。また、橈骨遠位端骨折を契機として骨粗鬆症の存在が認識されるケースも多く、本疾患を入り口とした骨粗鬆症治療についてのテーマでもご執筆いただいております。本誌を手にとられた先生方には橈骨遠位端骨折の治療法選択、術式選択、インプラント選択はもとより、関連疾患治療の知識の整理とアップデートにお役立ていただき、明日からの診療の一助になれば幸甚に存じます。

流山中央病院整形外科

國吉一樹